『ルーゴン・マッカール叢書』における〈予告〉：登場人物に与えられた機能

中村　翠

序論

ゾラの小説は，死後100年以上経った現在でも尚読まれ続けている。特に20巻からなる『ルーゴン・マッカール叢書[1]』は，一冊一冊が長いにも拘わらず，幅広い読者層を楽しませている。大衆を惹き付けるというゾラの小説のこうした特性は，読者の期待を維持させる様々な工夫によると考えられる[2]。そうした工夫の中でも，ゾラに限らずしばしば見られるものが，予告という手法である。それは，物語のクライマックスで起こる出来事を，比較的早いうちに読者に予感させるような表現を，テクスト中に書き込むことである。例えば，« nous verrons » « on verra plus tard[3] »といった表現で，後に語られるであろうことを読者に直接示唆する表現や，あるいはそこまで直接的ではなくても，« ils n'emportèrent [...] que le pressentiment vague d'une vie courte[4] »といった，間接的ではあるが，さほど穿った読み方を心得ていない読者でも，すぐ読み取れるような表現がそれである。そうした予告が本当に実現するのか，そしてまた，実現するなら，どの様に実現するのかを，先まで読んで確かめたいという気を起こさせること—すなわち期待が向かうべき指標を読者に示すこと—が，予告の働きである。ただし，最初から全てが明らかになっては，逆にサスペンスが奪われるので，常に曖昧な，あるいは簡潔な仕方でしか行われないことも，重要な点である。

こうした予告という手法については，今までの研究は体系的には言及してこなかった。確かに「予告」という用語は，ジェラール・ジュネットが，*Figures III*における« Prolepse »の章で考察している « annonce »を念頭に置いている[5]。それは本稿で取り扱う手法と比較的似たものを指し示しているからである[6]。しかし，ジュネットの研究においても，予告は不完全な形でしか定義されていない。すなわち，語り手によって地の文の中で語られる予告しか，ほとんどその対象とはしていないのである。ところが，読者に先の出来事を予感させることが予告の主たる機能だとして捉えると，登場人物の台詞に組み込まれている場合も予告として考えることができる。また，人間の登場人物のみならず，自然や，静物，動物が予告者であることもある。この様に新たに定義をしなおして，予告の問題を明るみに出す事は，文学作品の求心力を一端なりとも説明することを可能にするだろう。

ゾラの小説においては，登場人物の中でも特に，物乞い，精神病患者，アルコール中毒者などマージナルな人物によって予告がなされる場合が多い。この特徴に焦点を絞ると，予告が曖昧な形で表れるということと対応するのではないかと考えられる。予告という手法と，予告者のマージナルな特性との組み合せは，物語にどのような効果を生むのか。第一章ではゾラ作品における予告の機能と効果を，第二章では予告を担う者の描かれ方を論じ，第三章では，予告の受け手の問題を通じて，この手法からゾラが小説中に描き込んでいた社会的な構造を読み解きながら，この問題に対する答えを探っていく。コーパスとしては，『ルーゴン・マッカール叢書』全体を対象とするが，特に詳しく考察するものは，『居酒屋』，『生きる喜び』，『ルーゴン家の繁栄』である。

第一章　予告の機能

a.射程と反復

ゾラ作品において，この手法は，綿密な計算のもとに，効果的に演出されている。特徴の一つには，射程—すなわち，予告からその実現までの長さ—が長いことが挙げられる。予告がすぐに実現されてしまえば，期待はすぐに解消される。逆に長ければ長いほど，期待が持続する。

ところが，あまりに長すぎると，最初の予告そのものが忘れ去られてしまう恐れがある。そこで，特徴の二つ目である反復が行われる。読者に思い出させるためである。特に新聞連載小説の場合，何ヶ月もの期間に亘ってようやく一つのストーリーが掲載されるため，反復は必要となる。ただし，二度目以降の予告は，一度目のものを思い出させる役割に徹しているものが多いため，厳密に言えば「予告」というよりも「予告の喚起」というべきである。しかしながら後者は，過去に発言された予告へ遡ることを通じて，将来起こる事柄を指し示してもいる。また，予告が最終的に実現した際にも，それまでに繰り返されてきた予告を，同じ表現を用いるなどして思い出させ，念押しすることが多い。いわゆる実現の確認である。これらをまとめて単純に「予告」と呼ぶこととする。ゾラにおけるこれらの特徴は，期待を持続させる効果を強めると共に，読者にとって予告のサインを読み取りやすくするための，大きな助けとなる[7]。

このようにゾラの作品においては，例外はあるにせよ，予告は，長い射程と反復を持つ傾向にある。例えば『ボヌール・デ・ダム百貨店』では，オクターヴ・ムーレが一人の女性に征服されるであろうことが，第２，３，９，11章で予告され，『ジェルミナール』では，ヴォロー炭鉱の破壊が，第三部１章，４章，第四部４章，第六部３章，第七部２章で五回に渡って予告されている。本論の第二章で扱う『生きる喜び』では，全11章中，１章，４章，７章の三度，第三章で扱う『ルーゴン家の繁栄』では，全７章中，５，６，７章の三度である。詳しくは，後に付ける別表を参照されたい。

この章で扱う第７巻の『居酒屋[8]』では，葬儀人夫バズージュが五度に亘って登場し，予告者の役割を果たす（全13章中，第３，９，10，12，最終章）。その都度，主人公ジェルヴェーズの零落と死にまつわる言葉を発している。

b.配置

これらの数度の予告は，単に機械的な仕方で間隔をあけて配置されているわけではない。むしろ，最も予告の効果が際立つように，物語の転機点に配置されていることが多い。反復の比較的多い『居酒屋』での予告を取り上げて，それが置かれている文脈を考察する。

バズージュの一度目の登場は，第3章でヒロインのジェルヴェーズが，クーポーと結婚した晩である。結婚式が終わって，アパートに帰ってきた二人は，全身黒ずくめの陰鬱な格好をしたバズージュにすれ違う。怯えるジェルヴェーズに彼はこう言う。

> Ça ne vous empêchera pas d'y passer, ma petite... Vous serez peut-être bien contente d'y passer, un jour... Oui, j'en connais des femmes, qui diraient merci, si on les emportait[9]．（下線は引用者）

人は誰でも死ぬ。それは当然であるが，ここでは，« contente d'y passer »という表現によって，彼女が死を望むほどの惨めな境遇に落ちぶれるだろうということを，暗に仄めかしている。そしてこの不吉な予言は，彼女の結婚式という日に，既に暗い影を落としている。これからジェルヴェーズは洗濯屋を開き，生活が上向きになっていく事を考えれば，まさに上り坂のちょうど出発点に第一回目の予告が置かれたことになる。明暗のコントラストが，意外性を際立たせているのである。

第二回目の登場は，決定稿では少し間があいていて，第9章となる。クーポーの母親が死に，バズージュは遺体を引き取りに来る。しかし，最初彼は，ジェルヴェーズが死んだと勘違いしていた。ぎょっとしたジェルヴェーズに，彼は次のように言う。

> Dites donc, ma petite mère, ce sera pour une autre fois. Tout à votre service, entendez-vous ! Vous n'avez qu'à me faire signe. C'est moi qui suis le consolateur des dames... Et ne crache pas sur le père Bazouge, parce qu'il en a tenu dans ses bras de plus chic que toi, qui se sont laissé arranger sans se plaindre, bien contentes de continuer leur dodo à l'ombre[10]．（下線は引用者）

二度目のこの予告は，一度目よりも詳しい内容になっている。ジェルヴェーズが死を望むようになるだろうという先の予告に加えて，そうなった時は合図をするようにと促している。この時期は，彼女の家に昔の愛人ランチエが入り込んできて，暮し向きが傾き始めた頃であった。先の予告ではちょうど上り坂に入る地点だったことから比べると，こちらは坂を下り始める地点であり，対を成すと言えよう。

それにしても，一度目と二度目の予告の間隔はかなり長い。この事に関しては，ゾラが組んだ物語の一番初めのプランを参照してみよう。そこでは既にバズージュの登場が6度，短い言葉で示されている。配置はほぼ決定稿と同じであり，作者が早い段階から予告を綿密に計算された場所へ挿入しようと意図していた事が窺える。ただし，プランでは最初の予告は，結婚式当日ではなく，ヒロインとクーポーがロリユー夫妻に挨拶にやってきた日に，階段でバズージュと遭遇し

てなされることになっている。そして，決定稿で言えば7章にあたる，有名なジェルヴェーズのパーティーに，プランではバズージュも招待されることになっている。つまり，初めの構想では，ヒロインの幸福の頂点にも，葬儀人夫が立会い，不吉な予告のことを思い出させるはずだったのである。その証拠に，« Bazouge invité. »というメモがあり，すぐ後に，« Heureuse encore, pas désir de la mort[11] . »と予告の進行状況が報告されている[12]。

また，作家本人がそこから生じる何らかの効果を狙っていたことも明らかである。というのは，『居酒屋』が舞台化された時，第3幕末でバズージュの登場が削られていたことについて，「バズージュを外さないこと，彼の二度の登場が効果を生むだろう[13]」という意見を演出家のビュスナクに書き送っているからだ。この効果がどの様なものかは，ゾラは明記していないが，これまでに分析したような予告の機能と効果を，作家本人が良く理解していたと考えられる。

決定稿に戻ろう。三度目のバズージュの登場時に，予告は進行する。それは彼女が落ちぶれてしまった10章でのことである。今までの部屋に住んでいることができず，家賃のより安い部屋へ移ったクーポー一家だが，そこはバズージュの隣の部屋であった。食べるものもなく，熱を出して気が弱くなっていた彼女は，我知らず薄い間仕切りを叩いてバズージュの名を呼んでしまう。死を望み，合図をするという先の二つの予告が，実現されている。ただし，ここではそれは不完全な形にとどまる。なぜなら，バズージュの応じる声を聞いて，彼女はすぐに我に返るからである。

> Mais, à cette voix enrouée, Gervaise s'éveilla comme d'un cauchemar. Qu'avait-elle fait ? Elle avait tapé à la cloison, bien sûr. Alors ce fut un vrai coup de bâton sur ses reins, le trac lui serra les fesses, elle recula en croyant voir les grosses mains du croque-mort passer au travers du mur pour la saisir par la tignasse. Non, non, elle ne voulait pas, elle n'était pas prête. Si elle avait frappé, ce devait être avec le coude, en se retournant, sans en avoir l'idée[14] .（波線は引用者）

ジェルヴェーズは「目覚め」，死にたいという思いを否定する。しかし，自由間接話法で書かれている「叩いたとしても，何の気なしに，寝返りを打ちざまに，肘で叩いてしまったに違いない」というアリバイは，あまりの不器用さのために，彼女自身これが本当ではないと実はわかっているということを，暗に示している。

彼女がここで押し隠した潜在的な欲求は，12章の四度目の予告では，もはや隠されることなくはっきりと表出する。どん底の生活にまで落ちてしまった彼女は，路上で売春をして稼ごうとするが，グージェにたまたま遭遇してしまう。グージェは彼女を家に連れ帰り，温かいスープを与える。かつて精神的な愛情を育んでいた男の前で惨めな姿を晒して，自暴自棄になったジェルヴェーズは，家に帰るとバズージュの部屋へ入り込む。

> Alors, Gervaise, les bras tendus, ne sachant plus ce qu'elle bégayait, se mit à le supplier avec passion. « Oh ! emmenez-moi, j'en ai assez, je veux m'en aller... Il ne faut pas me garder rancune. Je ne savais

pas, mon Dieu ! On ne sait jamais, tant qu'on n'est pas prête... Oh ! oui, l'on est content d'y passer un jour !... Emmenez-moi, emmenez-moi, je vous crierai merci ! »[15]（波線及び下線は引用者）

ついにここで，予告は完全に実現する。彼女は自ら死を望むほどの不幸に陥り，はっきりと助けを求めている。そればかりか，以前葬儀人夫の言葉に耳を傾けなかったのは，まだ準備が出来ていなかったからだと認めてさえいる。前回の引用箇所での波線部と同じ，« ne pas être prête »という表現が，再び使われている。しかしこの場合は，彼女が既に「準備ができている」状態であることを，言外に物語っているのである。

それ以外にも，同じ表現の反復は多用されている。これまでに下線で示した，« content d'y passer un jour », « dire merci » などの表現，もしくはそれと同じ意味を持つ表現が，最初の予告からたたみかけるように繰り返される。バズージュの登場の度に回帰してくるモチーフは，読者に以前の予告を思い出させるために提示された，一貫性のある目印となっているのである。

こうしてバズージュの言葉をいよいよ認めたジェルヴェーズだが，彼の方は« Dame ! il y a une petite opération auparavant[16] . »と求めに応じない。彼女の願いがようやく叶うのは，第13章，結末である。この時，彼女の遺体を引き取りに来た葬儀人夫は，次のような台詞を口にする。

En v'là une qui ne voulait pas, puis elle a voulu. Alors, on l'a fait attendre... Enfin, ça y est, et, vrai ! elle l'a gagné ! Allons-y gaiement ![17]

« En v'là une qui ne voulait pas »は，一度目と二度目に葬儀人夫が登場する時の状況に，« puis elle a voulu » は三度目と四度目に，« on l'a fait attendre »は四度目，« Enfin, ça y est, et, vrai ! elle l'a gagné ! »は最後に，それぞれ対応しており，これまでの予告の進行を端的に要約している。その構造は，次のように示せる。

1	大まかな予告（ジェルヴェーズの死への願望について）	ジェルヴェーズの死についての予告
2	より詳細な予告（バズージュに助けを求めることについて）	
3	1，2の予告の不完全な実現	
4	1，2の予告の完全な実現	
5	ジェルヴェーズの死	予告の実現

つまり，四度目までの予告は，段階を追って詳細になり，徐々に実現されていくというグラデーションを描いている。そして，これら四度の予告が暗黙のうちに共通して指し示している，ジェルヴェーズの実際の死についての予告は，五度目で実現される。このように，反復された予告は，ヒロインの人生の盛衰をなぞりながら，実現までの漸次的な流れを描き出すよう，巧みに配置されているのである。

第二章　予告者

a.脇役

予告が効果的に読者の期待を引き付けて離さないためには，前述のとおり，その内容が不確定であることが必要となる。確かに期待を向けるべき指標が存在している方が，期待は生じやすい。いわば，問題提起と同じ役割を果たしているわけだ。だが，存在していればしていたで，もしその答えが読むまでもなく明白な場合には，逆に期待を殺してしまう。故に，すぐには結果がわからないような形で提示されることが，予告の条件となってくる。それには，予告を担う側，つまり予告者の性質が，大いに関わっている。

まず，予告者は脇役でなければならない[18]。何故ならば，予告をする者とは，多かれ少なかれ将来の出来事を知っている者だからである。こうした知識に基いて，ほかの登場人物に予告をするわけだ。もし，主要人物に将来の知識があれば，好ましくないことを回避出来るため，予想外の出来事は起こり得ない。すると意外性は全く失われ，物語は冗長なものになる。筋に大きな影響力を持つ主要人物だからこそ，彼らは将来の知識を欠いていなければないのである。一方，脇役は筋に深く関わってはいない。よって，彼らに将来を見通す力があっても，筋に対する影響力は副次的なものにとどまり，サスペンスを損なわないで済む。

また，脇役の登場回数の少なさも，予告者にとっての必要条件である。というのも，予告者は筋に関わってはならないという点を満たすならば，彼らに残された役割とは唯一つ，予告者であることのみだからだ。つまり，彼らが登場する時は，大抵が予告をする時に限られるのであり，当然登場回数は少なくなる。予告者は，トランプのカードかチェスの駒のように，一つの機能に集約された登場人物なのであり，数度の決め手にだけ，その機能を果たすために登場する。この点でも，脇役であることは予告者の条件と合致する。

そもそも，« personnage »のラテン語源は，« persona »であり，演劇用の仮面を意味する。もとは，登場人物の各々は，固定された仮面の表情によって，一つの人間のタイプを具現化していた[19]。後に登場人物の豊かな感情のひだを描写することが当たり前となっても，この元来の性質は，ゾラ作品の脇役においては依然として生きている。ゾラ自身が，主要人物とは違って，脇役にはたった一つの特徴を割り当てていることを，アンリ・セアールに宛てた『ジェルミナール』に関する手紙の中で述べてさえいる[20]。こうしたたった一つの役割が，予告者においては，予告をすることなのである。彼らは，フィリップ・アモンがいうところの« les personnages anaphores »の役割を果たしている。アモンは次のように言う。

> [...] ils [les personnages anaphores] sont en quelque sorte les signes mnémotechniques du lecteur ; personnages de prédicateurs, personnages doués de mémoire, personnages qui sèment ou interprètent des indices, etc[21] .

ここでいう« les signes mnémotechniques du lecteur »こそが，読者に先を垣間見せたり，または過去に発言された予告を思い出させたりする，予告者の機能なのである。

本稿で取り上げる予告者でも，『居酒屋』のバズージュや，『生きる喜び』のプルアーヌはまさに筋の前景には関わらない脇役であり，登場回数が少ない。『ルーゴン家の繁栄』で予告をするアデライド・フークは，確かにルーゴン・マッカール家の系図の根幹を為す人物であり，全20巻の作品に遍在する。しかし，いずれの作品においても，その物語の筋からは離れた所にいる。この第1巻の作品の筋は，ルイ・ナポレオンによる1851年12月2日のクーデターと，それに反対する共和派の民衆蜂起であるが，アデライドはそうした政治には一切関わっていない。むしろこの筋に関与する主要人物は，ナポレオン派のピエール・ルーゴン夫婦，蜂起に参加する共和派のシルヴェール・ムーレとその恋人ミエット，蜂起団のリーダーでありながら後に裏切るアントワーヌ・マッカールなどである。『愛の一ページ』のフェチュ，『ジェルミナール』のスーヴァリンなども皆，副次的な登場人物である。

以上の考察から，予告者が脇役に任じられることによって，次の二点が可能になるということがわかる。すなわち，主要人物自らは将来を知り得ないという状況が，自然な形で設定される。よって予告の不確定性が保たれる。また，脇役は登場回数が少なく，筋に密接には関わらないため，ある一つの機能のみに集約され得る。従って読者にとって，その機能を読み取り，物語に関する記憶を助けることが容易になる。

b.マージナルな登場人物

ところが，予告者がいくら脇役であっても，彼の発言がすぐさま主要人物によって信じられてしまうようでは，不確定性は消失する。そこで今度は，主要人物が予告者の発言に重きを置かないという条件が求められる。このことに関して，ゾラの作品では，物乞い，精神病患者，アルコール依存者など社会の周辺にいるとされる人物がしばしば予告を担っている事に注目したい。そうしたマージナルな人々は，その知的・社会的な劣等性から，理性を持たないのだと暗黙の内に見なされていることと関連していると考えられる。例えば，バズージュは，初回から最後の登場まで，常に酔っ払っているという形容とともに現れる。『居酒屋』はその題名のとおり，アルコール依存症に陥る登場人物が複数いるが，最初からそうだと言うわけではない。最初から最後まで酔っ払っているのは，バズージュのみである。二回目の登場の際，ジェルヴェーズは彼の予告に対し，「彼は酔っ払っているわ[22]」と言う。つまり，酔っ払っている人間は理性がないので，彼の言う事は聞くに値しない，と言外に否定しているのだ。それに彼の職業が，社会から必要とされながらも忌み嫌われる葬儀屋であることで，彼の発言が軽んじられる状況がより一層整う。他の数例を挙げると，『ルーゴン家の繁栄』のアデライドは発狂するし，『プラッサンスの征服』のアントワーヌ・マッカールもアルコール依存症であり，『愛の一ページ』のフェチュは逢引宿を営むいかがわしい物乞いの老婆であるし，『ジェルミナール』のスーヴァリンは破壊思想を持つロシア人のアナーキストである。

マージナルという語を拡大解釈すると，理性がないと見なされている人々だけでなく，共同体

の周辺，という意味でもこの問題に当てはめて考えられる。『ルーゴン・マッカール叢書』の一冊一冊は，それぞれ社会のある分野（政治界や市場，炭鉱，百貨店，軍隊など）を取り上げ，その世界での出来事を描いている。その中心に存在する共同体に属さない者達も，マージナルな人物と言うことができる。そして，そういう人々は，共同体と同じ理念を共有していないという理由で，時として相手にされない場合がある。『壊滅』では，普仏戦争における軍隊が物語の中心的な共同体となっている。そこへ義理の弟に面会にやってきたシーツ工場監督のウェイスは，プロシア軍の強さを述べ，フランスの敗北を予告する。しかし，軍隊の兵士たちは，おそらく愛国心という連帯によってその言葉を聞き入れない。兵士でない者が戦争について言うことを信用できないというわけである。この様に，理性的な話をすることができないと見なされている人のみならず，共同体に属していないために，発言を信じてもらえない登場人物も，予告者として機能するのである。こうした人物は，物語の中心となるグループからは外れているという点において，脇役であることと両立している。

『生きる喜び[23]』では，上の二つの点を兼ね備えるプルアーヌが予告者を演じている。そこで，この作品における予告者の描かれ方を考察していく。プルアーヌの初回の登場は第1章とかなり早く，ヒロインである孤児のポーリーヌがノルマンディーの親戚シャントー宅に受け入れられた日になっている。シャントー家は，海沿いの漁村の村長である。その日海が荒れ，村の家々が破壊されたというニュースを，プルアーヌが伝えにやってくる。その時になされる彼の描写は，« [...] Prouane, un ivrogne qui servait de bedeau à l'abbé Horteur, remplissait en outre les fonctions de greffier[24] . »と，何をおいてもまず，酔っ払いという性質から始まっている。彼の職業が教会守であることや，書記の役も務めていることよりも，この特性が彼の第一印象となっていることに注意したい。ヒロインの従兄のラザールは報告を受けて，漁村へ降りていって何か手伝いになることをしようと提案するが，プルアーヌは，自然の脅威に対しては人間はなされるがままでいる他はない，と却下する。

> —Pas la peine de vous déranger, monsieur Lazare. Vous n'en feriez pas davantage que les camarades. Nous sommes là, à la regarder nous démolir tant que ça lui plaira ; et, quand ça ne lui plaira plus, eh bien ! nous aurons encore à la remercier...[25]（下線は引用者）

« Vous n'en feriez pas »と条件法現在で書かれるこの台詞は，もちろん現在の状況について語っているものではあるが，それだけではなく，教訓めいた言い回しによって，今後のラザールの自然に対抗する試みとその失敗をも，既に予感させている。

二度目の登場は4章に位置するが，その少し前に，ヒロインが村の子供たちに施しをする場面で，彼が実際に登場するわけではないのだが，プルアーヌ一家の様子が紹介されている箇所がある。

> Les Prouane n'avaient pas de barque, ramassaient des crabes et des moules, vivaient de la pêche aux

crevettes. Mais, grâce à la place de bedeau, ils auraient encore mangé du pain tous les jours, sans leur ivrognerie. On trouvait le père et la mère en travers des portes, assommés par le calvados, la terrible eau-de-vie normande ; tandis que la petite les enjambait, pour égoutter leurs verres. Quand le calvados manquait, Prouane buvait le vin de quinquina de sa fille[26].

ここではプルアーヌ一家の過度なアルコール依存が描かれている。本来なら教会守の仕事から得られる収入でパンを毎日食べられるはずなのにも拘わらず，その金は全てカルバドスに費やされ，それが尽きると，ポーリーヌがプルアーヌの娘テレーズに強壮剤として与えたキンキーナまで，父親が取り上げて飲んでしまう。この場面でも，ポーリーヌがテレーズにキンキーナをちゃんと飲んだかどうか尋ね，テレーズが飲んだと答えた時，オルター牧師は« Menteuse ! [...] Ton père sentait encore le vin, hier soir[27] »と叫んでいる。

もうひとつ注目したい点は，この家族が完全には漁村の人々にも属していないということである。プルアーヌには船が無く，浜辺で取れる魚介類で生活をしているし，漁師たちと違って教会守の仕事をしている。しかし，当然のことながら，シャントー家のようなブルジョワにも属していない。彼のこの狭間の位置が，予告者として打ってつけの特性となっている。冒頭で村長の家に漁村の惨状を報告に来たのは，プルアーヌであったことからも分かるとおり，漁村とブルジョワのどちらにも属さない代わりに，双方を結ぶ掛け橋のような役割を果たしている。確かにこの作品の場合，将来の知識を持っている者は，プルアーヌだけではなく，漁村の人々全体である。ただし，主要人物に対して予告をすることが出来るのは，シャントー家とも接点を持つプルアーヌのみだ。すなわち，物語にとって主な共同体に属してはいないが接している者こそが，予告者になるのである。

この箇所のすぐ後に，プルアーヌの二度目の登場が位置する。ラザールはプルアーヌの前回の忠告を聞かず，海から村を守るために，堤防を築いていた。それが嵐に耐えたことを喜んで得意になるラザールに，プルアーヌは冷水を浴びせる。

— Je le disais bien! criait Lazare. Maintenant, vous pouvez vous moquer d'elle [la mer] ! Près de lui, Prouane, qui n'avait pas dessoûlé depuis trois jours, hochait la tête en bégayant :

— Faudra voir ça, quand le vent soufflera d'en haut.[28]（下線及び波線は引用者）

単純未来で語られているこの台詞は，「上から風が吹いたとき」という条件を課して，堤防が崩れることを暗示している。このことは，自然に対しての敗北という初回の予告を，より詳細な事例において演繹した予告なのである。また，波線部の通り，彼は3日前から酔いが醒めていない。この様な尋常でない酔いぶりは，発言の信憑性を損なうものである。ところが，第7章では実際にこの条件通りに実現する。プルアーヌは，次のように言う。

— Je disais bien, répétait Prouane, très ivre, adossé à la coque trouée d'une vieille barque, fallait voir

> ça quand le vent soufflerait d'en haut...[29]（下線及び波線は引用者）

前回，単純未来で言われたプルアーヌの言葉は，時制だけが過去に変わり，一言一句違わず繰り返されている。こうした対句は，読者に予告と実現の完全な対応関係を確認させるのに役立っている。予告者には「大変酔っ払って」という形容が相変わらず伴っている。そして，彼の寄りかかっている穴の開いた古い小舟は，底無しに酒を飲むプルアーヌを想起させる。この舟はもはや使い物にならず打ち捨てられたままであり，それを透して漁村の生活の荒廃が反映されている。酔ってだらしなく小舟に寄りかかるプルアーヌが象徴するように，漁村の人々はそうした荒廃をひたすら怠惰に受け入れているとラザールの目には映っていたのであり，現状を改善すべく，正義に燃えて工事に取り掛かったのだ。ところが，自分の言った事が現実になった今ではもはや，プルアーヌの態度は勝ち誇っている。小舟に寄りかかるその仕草には，優越感が見られるし，下線部の« Je disais bien »という語の中には，「だから言ったのに」という嘲笑が含まれている。前回の予告の時点で，ラザールが言った« Je le disais bien »とほとんど同じ言葉を，今度はプルアーヌが口にしていることから，この言葉が発言された二回の場面では，立場が逆転している様子が強調され，痛烈な皮肉が効いている。

堤防が壊され，村は被害を受けたので，ラザールは村の人々に立ち退くよう勧める。しかし，彼らの猛烈な反対に遇う。いかに海が脅威的な存在であろうとも，何百年も昔から先祖代々ここに住んできたのに，立ち退くわけがない，そもそもどこに行くのか？というわけである。そんな中，プルアーヌも訓戒めいたことを言う。

> Ainsi que le disait Prouane, lorsqu'il était très ivre : « Fallait bien toujours être mangé par quelque chose. »[30]（波線及び下線は引用者）

言葉の使い方は異なるが，最初の普遍的な予告と同じ内容が，ここで受けられている。つまり，人知の及ばぬ力には無抵抗でいるべきだという彼の持論が，証明された形になっている。下線で示したように，最初の予告の単純未来に比べ，こちらは半過去を使う事で，対をなしている。これら4つの予告を表に表すと，次のようなchiasmeになる。

1	普遍的な予告（自然に対する抵抗は無駄だという事）
2	より詳細な予告（風が上から吹いた時には、堤防が壊れるという事）
3	2の予告の実現
4	1の予告の実現

予告者であるプルアーヌは，最後まで酔っ払いであるという言及がなされていた。それによって，主要人物にとって，彼の発言がすぐには肯定できかねるものだと見なされても不自然でないような状況が整っている。そのことが，予告が最初から明白なものとなることを妨げている。ま

た，彼の立場は少し特殊で，漁師でもなければブルジョワでもないが，どちらにも出入りできるという特性が，予告者としての機能を充分に活かすのに役立っているのである。

第三章　非理性

a.予告される不幸

予告者のマージナルな性質が，予告を疑わしくさせるということを前章では見て来たが，それにはサスペンスを保つ以外にもう一つ効果がある。すなわち，予告が実現されたとき，より悲劇的に演出されるということである。もし予告者の言うことをきちんと聞いていればこういうことにはならなかったのに，実際には信じなかったため，望ましくない事が起こることを避けられなかったのだ，という後悔の念が，主要人物に生じる。« Je disais bien »というプルアーヌの言葉も，こうした後悔を一層煽るものと言えよう。ゾラ作品の予告者は，カッサンドラと同じように，信じてもらえないという運命を背負って，悲劇を強めている。

確かにゾラ作品では，予告の内容はほとんど常に，不幸の前触れとなっている[31]。では，何故予告はいつも不吉なのだろうか。予告者の物乞いや酔っ払いや狂人といったマージナルな特性は，ある種恐れを抱かせるものであり，それが不吉さを増していることは事実だ。しかし，それは発話される時の外的な効果であって，内在的な要因とはならない。そこで，予告の内容をつぶさに見てみよう。

先ほどのプルアーヌの予告は，自然に抗っても無益である，というものだった。しかし人間の技術を信じるラザールは，それを無視して抵抗を試み，失敗する。ここで二つの理念が対立していることがわかる。進歩主義・科学技術の万能を信じたいラザールとしては，その反対を唱えるプルアーヌの意見は，好ましくないものである。また『居酒屋』のジェルヴェーズも，初めは真面目に働いてつつましくも良い暮らしをしたいと望む。だが，バズージュが唱える退廃と死への衝動は，それに反するものであり，これから向上しようとする彼女にとっては，見ないようにしたいと願っているものなのだ。こうした好ましくない意見は，ともすれば主要人物の行動や道徳，ひいては生までをも全く無意味なものに帰してしまう恐れがあるからである。もしその意見が実現すれば，主要人物が今まで掲げてきた理念は否定され，拠り所を失い，挫折感と虚無感を味わう。つまり，不幸か否かの基準は，主要人物の理念にかかっており，予告者の言葉はそれを突き崩す力を持つものなのである。

ところが，予告が次々に実現し，最終的に主要人物もそれが正しかったことを認めることを見れば，予告者の持つ理念の方が本当らしいことが窺える。例えば『生きる喜び』における，予告が実現した後のプルアーヌの念押しを，本稿第二章で引用したが，そのすぐ後で，ポーリーヌは彼に次のように賛成している。

> Pauline souriait, approuvait de la tête, car <u>le bonheur</u>, selon elle, ne dépendait ni des gens ni des choses, mais de la façon <u>raisonnable</u> dont on s'accommodait aux choses et aux gens[32]．（下線は引用者）

ラザールとプルアーヌの水面下の対立には，それまで意見を表明していなかったポーリーヌだが，今や，「幸福」とは状況に適応することなのだという点でプルアーヌの考えに歩み寄っている。ただしプルアーヌ自身が「幸福」とまで言っているわけではないのだが。このように純粋にプルアーヌの言葉を肯定できたのは，プルアーヌの考え方と直接対立していたラザールではなく，ラザールの手伝いをしながらも完全に彼と考えを等しくしていなかったポーリーヌだからだと考えられる。一方『居酒屋』のジェルヴェーズは，自らはっきりと死への衝動を認める。第一章で引用したこの箇所について，巻末の « Notes et variantes »を参照すると，決定稿の779頁の« Oh ! oui, l'on est content d'y passer »の部分が，連載当時のテクストでは，« Oh ! *que vous aviez raison de dire qu'*on est bien content d'y passer[33] »と，バズージュの方が正しかったと認める姿勢がより明らかに表現されている。ここでジェルヴェーズが使う« raison »という言葉の原義，及びポーリーヌの« raisonnable »という表現は示唆的である。一旦« raison »がないとみなされたマージナルな登場人物に，ここで« raison »が返還されるのである。

この様に，予告者は真実の保持者なのだとすれば，予告者が哲学者然と描かれるわけが理解される。プルアーヌはいつも « falloir »« avoir à »などの語で，格言のような表現をするし， バズージュは，「哲学的」という言葉で，最初と最後の登場を飾られている[34]。また，二回目の予告の時点では，不吉なことを言ったため，ロリユーに « Allons, fichez le camp, puisque vous ne respectez pas les principes. »と追い払われ，立ち去りながら最後に次のように独白する。

« De quoi, les principes !... Il n'y a pas de principes.. Il n'y a pas de principes... Il n'y a que l'honnêteté ! »[35]

このバズージュの言葉が端的に示すように，彼は物事を深く考える哲学者であり，歯に衣を着せず真実を正直に言うだけなのである。ところが，他の人々は，主要人物を含め，皆不文律を守り，好ましくない真実の存在を，潜在意識のうちに知りながらも，まるで知らないかのように装っている。このことは，ロリユーの« les principes »という言葉にも表れている。それは，ジェルヴェーズが拙いアリバイで自らの死の衝動を認めようとしなかったのと同じ行為である。

予告によって暴かれた真実に対する，この様な隠蔽行為を，『ルーゴン家の繁栄[36]』中の例で考察してみよう。この作品では，予告が政治的悪徳について言及している為，より隠蔽行為が難しくなっており，むしろその隠蔽行為自体の存在が明らかになってしまっているところが興味深い。

この作品は全20巻からなるシリーズの第１巻であり，全７章中，第２章の最初から第４章の半ばにかけて語りが過去に遡り，彼女とその子孫のこれまでの人生が紹介されているため，予告の登場は第５章と遅い。予告を担うのは，周りから気が狂っていると考えられているアデライド・フークである。ある日彼女は，長年閉め切っていたはずの塀の古い扉が開き，孫のシルヴェールとミエットが会っているのを見て，同じように逢引をしていた若かりし頃の自分と愛人マッカールの姿を投影する。その夜，彼女は神経症の発作に襲われ，うわごとのうちに若い二人が憲兵によって銃で殺されるだろうと，単純未来で語る[37]。密猟者のマッカールがかつて憲兵に銃で撃た

れて死んだ記憶を，若い二人にも重ねているのである。それに対するシルヴェールの反応は書かれていない。憐れみをもってうわごとを聞いているだけである。

この後，シルヴェールとミエットは，ルイ・ナポレオンのクーデターに反対する共和派の蜂起に参加する。アントワーヌ・マッカールは，反乱軍のリーダー格となるが，ナポレオン派のピエール・ルーゴン側と隠密に取引をする。金で買われ，蜂起団を裏切ってナポレオン派に引き渡そうとするのである。その計画を実行に移すまで，アントワーヌは自分の母親，アデライドの家に隠れることにする。そんな中，アデライドは第6章で二度目の予告をする。アントワーヌがシルヴェールの名前を出したのを聞きとがめて，« On me le[Silvère] tuera comme l'autre; ses oncles lui enverront les gendarmes[38] . »と言う。« l'autre »とは，死んだマッカールのことであり，一度目の予告と同じモチーフが暗に示されている。ただし一度目のものよりもより詳しい内容になっている。彼の叔父たちに遣わされた憲兵によって殺されると，単純未来ではっきり述べているからである。叔父たちとは，もちろん，ピエールとアントワーヌのことである。彼らは待ち伏せをして蜂起団を弾圧しようと計画しているのだから，それを知らずに反乱軍の中にいるシルヴェールには，実際に危険が迫っているわけだ。アデライドは周りから気が狂っていると見なされているにも拘わらず，自分の息子たちの策略を見透かしたかのようである。彼女は，対立する政治活動のどちらにも属していないからこそ，一歩引いたところから双方を見通していたのである。それに対し，アントワーヌは応える。

> — Qu'est-ce que vous marmottez donc là ? dit son fils, qui achevait la carcasse du poulet. Vous savez, j'aime qu'on m'accuse en face. Si j'ai quelquefois causé de la République avec le petit, c'était pour le ramener à des idées plus raisonnables. Il était toqué. Moi j'aime la liberté, mais il ne faut pas qu'elle dégénère en licence... Et quant à Rougon, il a mon estime. C'est un garçon de tête et de courage[39] .

「俺は正面から文句を言われるのが好きなんだ」と宣言している所を見ると，彼は自分が糾弾されている事に気付いていることがわかる。また，糾弾の内容すらも理解しているようだ。というのも，アデライドが直接そのことに触れたわけでもないのに，共和政についてシルヴェールと話したのは彼を教育するために過ぎない，と自己弁護しているからである。彼はリーダー格であったにも拘わらず共和派をいとも簡単に裏切ったことを，そのような言い訳で正当化している。その上，長年に亘って兄のピエールと諍いが絶えなかったにも拘わらず，手のひらを返したように褒め称えてさえいる。アントワーヌにとって明るみに出されたくないこと—金の為なら同志のみならず肉親までも犠牲にすること—を，アデライドは暴く。それに対するアントワーヌの防御策は，言い訳を弄して，遠まわしに否定することだけである。しかし，その婉曲さや正当化の試みそのものが，彼女の言葉が正しいと心の底ではわかっている，ということを浮き彫りにしている。

今までの考察をまとめると，予告とは，突拍子もない未来の予感ではなくて，真理や事実から具体的な個々の事象へと演繹された，妥当性のある予測である。これらの真理や事実は，死への

衝動や人間の非力さ，金銭欲などを容赦なく暴く。故にそこから引き出された予告は，主要人物が行動する際に差し障りとなるため，彼らは言い訳などを弄して否定しようと試みる。

b.非理性の範疇化

ところが，上記の様な否定の仕方では，むしろ予告への恐れを顕在化してしまう。そこで，より良い否定の仕方がある。それが，予告者を非理性という枠の中に閉じ込めてしまうことである。本稿第二章でも述べたとおり，『居酒屋』でジェルヴェーズは，バズージュに対して，「彼は酔っ払っているわ」と決め付けた[10]。この言葉は，酔っ払いは理性を持たないから，彼の発言は本当ではない，ということを暗に意味しているのだ，とその時は一応解釈した。しかし，酔っ払いが理性を持たないというのは本当であろうか。神経症患者が，マージナルな人々全体が，本当に理性を持たないと言えるだろうか。いやむしろ，先ほど述べたようにジェルヴェーズやポーリーヌが« raison »« raisonnable »という言葉で最終的に認めていたとおり，彼らは理性を持っている。そしてその上で，マージナルであるからこそ，共同体の人々にとって都合の悪いことであっても，真実が口に出せるのである。主要人物は，予告者が理性を持たないから信じられないのではなく，実はその反対で，信じたくないがために彼らを非理性だと公言するのである。この方法だと，予告者の暴く望ましくない事柄に直接言及する必要もなく，一瞬にしてそれをナンセンスなものに変化させることが出来る。『ルーゴン家の繁栄』の第７章で，シルヴェールの銃殺について三度目の予告が行なわれる時，その否定行為の図式が顕著になる。

留意しておきたいのは，今回の予告は，既にアデライドが銃殺刑を目撃した直後に発話されたものであって，厳密な意味での将来起こることの予告とは異なっている。むしろ，今までの例で言えば，予告の実現の確認にあたる。ただし，語りの時間がここで入れ替わっており，先にこの場面が置かれ，その後で物語の結末に，銃殺の場面が描かれる。すなわち，彼女の発言の時点では，読者にとってはまだ語られていない事柄についての前触れとなっている。また，彼女の発言の場に居合わせた主要人物たちも，シルヴェールの銃殺刑の事をまだ知らない。よって，機能としては予告に近いと考えられる。

彼女は，アントワーヌの数える金の音を耳にして，ピエールとアントワーヌ，それにピエールの息子のパスカルが居合わせる場で，激しく弾劾する。

> « Le prix du sang, le prix du sang ! dit-elle, à plusieurs reprises. J'ai entendu l'or... Et ce sont eux, eux, qui l'ont vendu. Ah ! les assassins ! Ce sont des loups. »
>
> [...]Et, reprise par une fureur sombre, agitant la carabine, elle s'avança vers ses deux fils, acculés, muets d'horreur. [...] « C'est vous qui avez tiré ! cria-t-elle. J'ai entendu l'or... Malheureuse ! je n'ai fait que des loups... toute une famille, toute une portée de loups... Il n'y avait qu'un pauvre enfant, et ils l'ont mangé ; chacun a donné son coup de dent ; ils ont encore du sang plein les lèvres... Ah ! les maudits ! ils ont volé, ils ont tué. Et ils vivent comme des messieurs. Maudits ! maudits ! maudits !»[11]

この « l'or »というのは，ピエールがアントワーヌに，共和派への裏切り行為の代償として支払った金のことである。誰とは名指しをしていないが，もちろん « eux » « loups » « vous »はピエールとアントワーヌの事を言っている。そして，「彼らは紳士のように生きている」という言葉は，金と名誉を得るためには人殺しをも厭わないにも拘わらず，そうした汚れた所業を包み隠して何食わぬ顔で暮らしているブルジョワの欺瞞さえも明るみに出している。この欺瞞の例は，実際にすぐに示される。というのは，彼らは自分たちの行為を包み隠すために，アデライドに非理性のレッテルを貼るのである。彼女がこれだけ周囲の事を的確に把握しており，理性そのものであるにも拘わらず，狂気へと分類するのに手を貸したのは，名声欲や金銭欲からは離れた所にいるパスカルでさえあった。それまでアデライドは本当に発狂していたわけではなかったのだが，この時彼は« Voilà ce que je craignais, dit le médecin, elle [Adélaïde] est folle[12] . »と言い，本格的な診断を下す。医師という立場から発された言葉は重みを持っており，先ほどのアデライドの発言が瞬く間に意味を失うのとは，ちょうど反比例の関係にある。しかし，こうして彼女を狂人扱いしながらも，彼女が現実の事柄を喋っていることを，パスカルは理解しているようである。その証拠に，ピエールが，彼女は何を見たんだろうと問うと，次のように応える。

> — J'ai un doute affreux, répondit Pascal. Je voulais vous parler de Silvère, quand vous êtes entré. Il est prisonnier. Il faut agir auprès du préfet, le sauver, s'il en est temps encore[13] .

ピエールの質問には直接答えず，すぐにシルヴェールの話を持ち出している。つまり，彼女の発作がシルヴェールが捕らえられていることと関係していることを，パスカルは知っているのだ。ただし，シルヴェールをこの様な危険な状況へ追いやったピエールたちの策略には触れずにいる。パスカル自身も，この真実を明るみに出さないようにするという暗黙の了解を，共有しているのである。ピエールは，それを聞いてこう反応する。

> L'ancien marchand d'huile regarda son fils en pâlissant. Puis, d'une voix rapide :
> « Ecoute, veille sur elle. Moi, je suis trop occupé ce soir. Nous verrons demain à la faire transporter à la maison d'aliénés des Tulettes. [...] »[14]

まず，ピエールが青くなっている所を見れば，ピエールにもパスカルの暗に示唆している内容が理解できたことがわかる。ところが，彼もシルヴェールの話題には直接答えない。二人の間では，沈黙の下に，一つの話題について，会話が成り立っているのである。ピエールは「今夜は忙しい」と言っているが，これは，反乱軍を鎮圧した手柄で，レジオン・ドヌール勲章を受けたピエールの，祝賀会のためである。受勲した人物とアデライドのような神経症患者とでは，発言の尊重のされ方が全く違うだろうことは想像に難くない。先ほどの医師と狂人という対比と同様，コントラストを為している。彼は，彼女を次の日，精神病院に連れて行くと言うが，自分の隠しておきたい所業を，彼女が明るみに出さないように，閉じ込める意図があると考えられる。

ここでは物理的に閉じ込めるという手段に頼っているが，観念上の非理性のカテゴリーに閉じ込めることだけでも，予告者の恐るべき力を無化することができる。つまり，『生きる喜び』でプルアーヌのことを誰も口に出して「彼は理性がない」とは言わなかったが，それでも度重なる彼の泥酔ぶりの描写が，恐らくラザールが無言のうちに，酔っ払いを非理性とみなしただろうことを，暗示しているように。

要約するならば，そもそも予告者は，主要人物のいる共同体には属さないマージナルな存在であった。まさにその事によって，予告者は，共同体の不文律から自由であり，故に禁忌を口にすることが出来る。この破られた禁忌が，予告の内容となる。それは，主要人物らにとっては脅威となる。そこで彼らは，予告者のマージナルという性質を逆手にとって，非理性と名付けた枠の中に予告者を囲ってしまおうとする。実際，マージナルという性質は，共同体を脅かす力を持つと同時に，容易に排斥されるほど社会的に弱い立場であるという逆説的なものなので，たやすく非理性とみなされてしまう[45]。そしてマージナルな人々を閉じ込めるこの非理性の枠自体は，共同体にとって不可欠なものとなっている。ゾラ作品における予告者と非理性の範疇化の仕組みは，社会的な抑圧体系を，眼前に繰り広げてくれるのである。

結論

ゾラの小説が何故多くの読者の関心を捉えるか，という疑問に端を発して，予告という手法がどの様な効果を生むかを論じてきた。まず，ゾラの作品中で，この手法が読者の期待を呼び起こし持続させるために，長い射程と反復を持っており，その数度の繰り返しは，物語の節目に配置されていることを論じた。次に，予告を担う者の性質に着目した。予告者は，その未来を見通す力によって物語の筋に影響を与え，サスペンスを損なわないようにするため，脇役のみに限定される。また，同じ理由で，予告がすぐさま主要人物に受け入れられないように，マージナルな人物に予告をさせている。ところが，予告の受け手が，予告を受け入れないのは，その内容が受け手にとって好ましくないことだからであるということを論じた。マージナルな人物が理性を欠いているから信じないのではなく，信じたくないから理性を欠いているのだと主張しているのである。こうしたことを読み解くに従って明らかになるように，ゾラ作品において，予告はこのような社会の抑圧のメカニズムを組み込んでいると同時に，その逆に，描きこまれたこのメカニズム自体も，サスペンスを保たせるための予告という手法をより緻密にする働きをしているのである。

表

『ルーゴン・マッカール叢書』中の予告を筆者が認める限り挙げた。丸でかこまれた数字は，同じモチーフを用いて最初の予告を喚起させる仕方で，予告の実現を確認している章である。登場人物名の前に？がついているものは，予告者が本論で定義するところのマージナルな人物であることを示す。

巻号	題名	予告の配置された章	予告者	予告の内容
1	*La Fortune des Rougon* 全7章	5、6、⑦章	？アデライド・フーク （神経症）	孫シルヴェールとミエットの銃殺
2	*La Curée* 全7章	1、⑥ 1、⑦章	・モンソー公園の木 ・ブーローニュの森	ルネの放蕩生活の行く末 義理の息子マキシムとの姦通
3	*Le Ventre de Paris* 全6章	4章	？クロード・ランチエ （芸術家、『製作』で発狂）	太った人々に追放される 痩せた人の運命
4	*La Conquête de Plassans* 全23章	9章 5章	？フランソワ・ムーレ （後に発狂） ？アントワーヌ・マッカール （酔っ払い、放蕩者）	火事 神父＝不幸を運ぶ者
5	*La Faute de l'abbé Mouret*　三部構成	第一部12章	アルシャンジア修道士	ムーレ神父の女性への傾倒
6	*Son Excellence Eugène Rougon*			
7	*L'Assommoir* 全13章	3、9、10、12、⑬章	？バズージュ （墓堀人夫、酔っ払い）	ジェルヴェーズの死
8	*Une page d'amour* 五部構成	第一部3章、第三部1章、第四部2章	？フェチュ（物乞い）	エレーヌとアンリの姦通
9	*Nana*			
10	*Pot-Bouille* 全18章	8章	ジュズール夫人	ベルトとオーギュストの結婚の失敗
11	*Au Bonheur des dames* 全14章	2、3章、9章、11章	ブルドンクル、 アルトマン男爵	ある一人の女による復讐 （ドゥズニーズとの結婚）
12	*La Joie de vivre* 全11章	1、4、⑦章	？プルアーヌ（酔っ払い）	海の脅威、防波堤の破壊
13	*Germinal* 七部構成	第三部1章、4章、第四部4章、第六部3章、第七部2章	スーヴァリン	ヴォロー炭鉱の破壊
14	*L'Œuvre*			
15	*La Terre*			
16	*Le Rêve*			
17	*La Bête humaine*			
18	*L'Argent*　全12章	1、4、10、⑫章	？メシャン夫人（の鞄）	新興会社の破綻、株価の暴落
19	*La Débâcle*　三部構成	第一部1章、8章 第一部8章、第二部2&②章	？Weiss（シーツ工場の監督） ・サパン伍長	普仏戦争でのフランスの敗北 自らの死
20	*Le Docteur Pascal*			

注

1） 本稿で引用されるゾラの小説のテクストは，すべて次の版からのものである。*Les Rougon-Macquart*, l'édition de la Pléiade, publiée sous la direction d'Armand Lanoux ; études, notes et variantes par Henri Mitterand, Paris, Gallimard, 5 volumes, 1960-1967.

2） これらの工夫は，連載小説において，より凝ったものに練り上げられたと考えられる。連載である以上，一つの物語全体の掲載は少なくとも数ヶ月の期間に亘り，その間，読者が離れないような工夫がより一層必要となるからである。因みにゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』は，20巻全てが連載小説であった。

3） Gérard Genetteによって，予告の例として挙げられたもの。(*Figures III*, Paris, Seuil, 1972, p. 111).

4） *La Fortune des Rougon*, t.I, p. 208.

5） Gérard Genette, *op. cit.*, p. 105-115.

6） 特に，伏線 « préparation »という広範囲の意味を持つ用語とは分けて整理すべきであるという点で，ジュネットの定義と一致している。例えば，伏線に属する布石 « amorce »という手法は，推理小説などによく使われる手だが，それが物語の中に用意されている時点では，その指し示す事柄がまだわからないように隠されており，後になってようやくわかるというものである。ゾラにおける例としては，『居酒屋』の第2章で，クーポーが« Dans notre métier, il faut des jambes solides » (*L'Assommoir*, t.II, p. 410)と言うが，この時には何の注意も喚起されない。ところが，第4章で彼が屋根から落ち足を折って初めて，その言葉の重要性がわかる。こうした場合，前以て期待は発生しないので，予告とは区別される。

7） これらがゾラの特徴であると主張するためには他の作家との比較をしなければならないが，これほどはっきりした予告が他作家ではあまり見つからないことと，紙面の都合上，次の二つの作品のみについて言及しておく。バルザックの『あら皮』（1831年）においては，物語の初めに古物商が主人公ラファエルの自殺は延期されただけだと言い，それが結末では間接的に実現された形となるが，結末に至るまで予告の反復も無ければ，実現後の確認も無い。従って，この予告の存在に気付くか否かは，読者の読解能力の有無にかかっている。あるいは，フローベールの『ボヴァリー夫人』（*Revue de Paris*に1856年6月から12月まで掲載）は，物乞いが三度登場する。ただし彼は歌を歌うだけで，直接将来を示唆するわけではないので，予告よりは布石と捉えた方が良いと思われるが，不吉な影を落としているのは確かなので，仮に予告に数えるとしても，その射程は大変短い。三部構成のうち，物乞いの最初の登場は第三部第5章と，既に物語の三分の二が終わったところである。三度目に物乞いが登場し，主人公が死ぬのは第三部第8章で，予告がもたらす期待は，その間しか続かなかったことになる。

8） この作品は第6章までの前半部が1876年4月13日から同年6月7日の間，日刊紙*Le Bien public*に連載され，後半部は同年7月9日から1877年1月7日まで週刊紙*La République des Lettres*に掲載された。

9） *L'Assommoir*, p. 463.

10） *Ibid.*, p. 665.

11） *Ibid.*, p. 1551（Henri Mitterandによる巻末の « Etudes »からの引用）.

12） しかし何故決定稿ではこの場面からバズージュが消されたのか。理由は幾つか考えられるが，パーティーの最中にランチエがクーポー家の中に入ってくる場面だけで，この瞬間を境にして，ヒロインの運命が良くない方向へ転がり落ちていくことが象徴されている。また，会食者が偶然13人になってしまい，慌てて一人呼んでくるという設定も，既に明るい場面に影を落としている。よって，これらの象徴と予告が重なって冗長にならないよう，節約したという可能性が高いと思われる。

13） « Garder le croque-mort, dont les deux apparitions feront de l'effet. » (« Lettre à William Busnach, L'Estaque, le 19 août 1877 » in *Emile Zola Correspondance* 1877-1880, vol. Ⅲ, éditée sous la direction de

B.H.Bakker, Paris, Presse de l'université de Montréal, Edition du Centre National de la Recherche Scientifique, 1982, p. 95).

14) *L'Assommoir*, p. 688.

15) *Ibid.*, p. 779.

16) *Ibid.*, p. 780.

17) *Ibid.*, p. 796.

18) 脇役と主要人物の区別については，以下のように定義することとする。すなわち，脇役は，主要人物と違い，物語の中心的な筋の展開にはあまり関与しない（たとえば，『製作』で主人公となるクロード・ランチエは，『パリの胃袋』においては脇役であるが，この作品の主人公フロランに，市場の人々を紹介するためだけに登場し，彼らの確執にはまったく参画していない）。従って，登場回数が主要人物に比べ，少なくなる傾向にある。なお，「物語の筋の展開」という言葉に関しては，« action »という語を念頭に置いている。定義としては，*Vocabulaire d'Esthétique*による« I-L'action diégétique »，特にその中でも« I-3 / Organisation des événements, structure dynamique qui assure la cohésion de l'œuvre »の項目を参照のこと。(*Vocabulaire d'Esthétique*, Etienne Souriau, publié sous la direction de Anne Souriau, Paris, Presses Universitaires de France, 1990, p. 37-40).

19) フィリップ・アモンによれば，« incarnation d'un type »という言葉で表されている。(Philippe Hamon, *Le Personnel du roman*, Genève, Droz, 1998, p. 10).

20) [...]l'abstraction du personnage, chaque figure raidie, n'ayant plus qu'une attitude. [...] De là une simplification constante des personnages. Comme dans mes autres romans d'ailleurs, les personnages de second plan ont été indiqués d'un trait unique : c'est mon procédé habituel [...] (« Lettre à Henry Céard, Paris 22 mars 1885 » in *Emile Zola Correspondance* 1884-1886, vol.V, 1985, p. 249).

21) Philippe Hamon, « Pour un statut sémiologique du personnage », *Poétique du récit*, Paris, Editions du Seuil, coll. « Essais », 1977, p. 123.

22) « Il est poivre. » (*L'Assommoir*, p. 664).

23) 1883年11月29日から1884年2月3日まで，*Gil Blas*紙に連載された。

24) *La Joie de vivre*, t.III, p. 827.

25) *Ibid.*, p. 829.

26) *Ibid.*, p. 898.

27) *Loc.cit.*

28) *Ibid.*, p. 909.

29) *Ibid.*, p. 984.

30) *Ibid.*, p. 1002.

31) たった一つ例外がある。第11巻『ボヌール・デ・ダム百貨店』のオクターブ・ムーレは，女性を金儲けの対象としか見なしていなかったが，一人の女性が彼を征服することになるだろう，という予告がなされる。それは実現してみれば，主人公ドニーズがムーレの心を掴み，結婚することを指していた。ただし，ここでも四度の予告の時点では，不吉な印象を与えている。

32) *Loc.cit.*

33) *L'Assommoir*, p. 1599（Henri Mitterandによる巻末の « Notes et variantes »から引用。強調は修正前の形。下線は引用者）.

34) バズージュが初めに登場した時，ジェルヴェーズが怯えて酔っ払いを追い払ってくれとクーポーに頼むと，彼は次のように振舞う。« Alors, Bazouge, en chancelant, eut un geste plein de dédain philosophique. » (*ibid.*, p. 463) また最後に，ジェルヴェーズが死んで遺体を引き取りに来た際の様子が以下である。« Quand il eut reconnu la pratique à laquelle il avait affaire, il lâcha des réflexions

philosophiques, en préparant son petit ménage. » (*ibid.*, p. 796)（下線は引用者）.

35) *Ibid.*, p. 665.

36) *Le Siècle* 紙に1870年6月27日から8月10日まで，ついで1871年3月18日から21日まで連載された。

37) « Je savais bien que cette porte nous porterait encore malheur... Ah ! les chers innocents, que de larmes ! On les tuera, eux aussi, à coup de fusil, comme des chiens. » (*La Fortune des Rougon,* p. 191).

38) *Ibid.*, p. 282-283.

39) *Ibid.*, p. 283.

40) 注22を参照。

41) *Ibid.*, p. 300-301.

42) *Ibid.*, p. 301.

43) *Loc.cit.*

44) *Loc.cit.*

45) このマージナルな人物の逆説的な性質は，フーコーが『狂気の歴史』の中で，19世紀の狂気について以下のように述べていることと相似している。« La folie est devenue la paradoxale condition de la durée de l'ordre bourgeois, dont elle constitue pourtant de l'extérieur la menace la plus immédiate. » Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique,* Paris, Gallimard, coll. " TEL", 1972, p. 399.